

小林秀雄批判としての『マチウ書試論』
——吉本隆明の一九五〇年代——

愛知教育大学特別教授
渡辺和靖

第一章『マチウ書試論』の構成について

『マチウ書試論——叛逆の倫理——』——以後『マチウ書試論』——がいつ執筆されたかについては、現在のところ、その時期が確定されるに至っていない。

『マチウ書試論』を構成する三つの論稿は、「1」が『現代評論』一九五四年六月創刊号に、「2」が同じ『現代評論』の同年一二月号に掲載され、「3」は一九五九年二月に刊行された『芸術的抵抗と挫折』に「1」「2」とあわせて直接収録された。

笠原芳光は『現代思想』一九七五年一月号に掲載された「吉本隆明における聖書」においてつぎのように述べている。

従来の年譜によるとこの「マチウ書試論」は一九五四年に『現代評論』にはじめて発表されたことになっていて、それはそれで間違いないのだが、執筆はその二年前の一九五二年になされ、一度『近代文学』に投稿されて保留されたということである。（『吉本隆明をへ読む』一九九頁、現代企画室）
『マチウ書試論』の三つの論稿は、いずれも「ぼく」という主語表記で統一されている。このことは、その執筆時期につい

て検討するうえで、重要な手掛かりを与えてくれる。

一九五〇年代に制作された吉本の評論作品の主語表記について検討してみると、『現代詩』一九五〇年七月号に掲載された「安西冬衛論」、『大岡山文学』同年一月号に掲載された「現代詩における感性和秩序——詩人Aへの手紙——」、『大岡山文学』一九五二年六月号に掲載された「アラゴンへの一視点」の三つは、主語表記が「僕」になっている。

つぎに『近代文学』一九五四年一月号に掲載された「ルカーチ『実存主義かマルクス主義か』」、『新日本文学』同年三月号に掲載された「日本の現代詩史論をどうかくか」、同九月号に掲載された「善意と現実」、同一〇月号に掲載された「新風への道」の四つは、いずれも主語表記が「ぼく」になっている。

『現代詩』一九五五年一〇月号に掲載された「関根弘『狼が来た』」になると、主語表記は「わたし」に変化し、以後、『国文学解釈と鑑賞』一九五八年一月号に掲載された「戦旗」派の理論的動向」にいたるまで、語る主体は「わたし」という表現に統一される。さらに、一九五九年九月に『新刊ニュース』に掲載された「現代詩のむつかしさ」において「わたしたち」という主語表記がはじめて使われるようになる。⁽²⁾

以上の考察を踏まえるならば、「ぼく」という主語表記を採っている「1」と「2」が、発表された時期とほぼ同じ頃に制作されたと推定することができる。同じく「ぼく」という主語表記を採っている「3」の原稿も、「2」に引き続いて一九五五年初めまではに執筆されたであろうと判断することができる。「3」の発表が一九五九年二月まで遅延したのは、掲載誌である『現代評論』が廃刊したことによるものと考えられることができる。

「3」が『芸術的抵抗と挫折』に近い時点で執筆され、収録するにさいして、主語表記を「1」「2」に合わせて「ぼく」に統一したとする推定も成り立つが、その場合はおそらく「わたし」に統一したと考えるのが合理的であろう。

笠原芳光が指摘するように、原型になるようなものが一九五二年に執筆され、これを発表するにあたって表記などを書き改めたという可能性を今のところ排除することはできない。しかし、その場合でも、内容がおおはばに変更されたであろうことは想像に難くない。

『マチウ書試論』は、「1」において新約聖書「マタイ伝」の成立について論じ、「2」においてドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』においてイワンが展開する「大審問官」の物語について検討し、「3」においてキリスト教とユダヤ教との関係について時代背景を踏まえつつ論じるという構成になっている。

しかし、「1」と「2」は「マタイ伝」に関わっているという共通性があるものの、「1」がマタイ伝の全体を扱っており、「2」がその一部分を取り上げていないという点で大きなちがいがあある。両者の間には論理的な関連性はないように見えない。

『マチウ書試論』は、あらかじめ設計された構想に従って順序立てて執筆されて発表されたものではないと考えることがで

きる。⁽³⁾ 発表の順序が執筆の順序であるとしても、発想されたのは「2」のほうが「1」よりもさきであったと推測される。笠原芳光が一九五二年に『近代文学』に投稿されたというのは、おそらく、「2」の原型のようなものではなかったかと推測される。

「2」よりも「1」が先に発想されたという根拠について述べてみよう。

「1」において展開された、新約聖書に描かれたイエスは旧約聖書やユダヤ教のタルムードに記述されたさまざまなエピソードを綴り合わせて構成されたとする解説において、ドレウスの聖書研究が重要な役割を果たしたことは吉本自身認めるところであり、すでに人々の指摘するところである。したがって吉本のうちに、キリスト教を新しい視点から解釈しようとする漠然としたアイディアがあったとしても、このような発想が具体的な形をとりはじめるのは、原田瓊生^{たよ}訳でドレウスの『キリスト神話』が刊行された一九五一年一月以後のことであったことはあきらかである。

これに対して「2」における、マタイ伝の「山上の垂訓」にかかわって、ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』でイワン・カラマーゾフが展開する「大審問官」の物語を主題とした議論は、論稿のなかにはいつさいその名前はないものの、次章で指摘するように、具体的には、小林秀雄のドストエフスキ論への批判である。

すでに一九四九年に執筆された三篇の評論によって、吉本はそれまで大きく依存していた小林秀雄からの脱却をはかっていたことはべつのところ指摘した。「2」はその延長線上に、あらためて小林秀雄のドストエフスキ論を批判するという意図をもって執筆されたものと推定されるのである。

『マチウ書試論』「2」において吉本は、福音書のなかで最も古いと言われる「マルコ伝」(マルク書)にはない、「マタ

イ伝」(マチウ書)にのみ見られる「山上の垂訓」における、荒野でのイエス(ジェジュ)と悪魔の問答を取り上げる。

マチウ書の直接の原型であるマルク書はここを、「かくて精霊はジェジュを荒野に追いやった。そこで彼は四十日を過しサタンに試みられた。」とかいてあるだけだから、四章のジェジュと悪魔との問答はマチウ書に特有なものである。(『吉本隆明全著作集』——以下『著作集』——第四巻、六九頁、勁草書房)

そこから吉本は、「マタイ伝」の「山上の垂訓」を題材としたドストエフスキの『カラマゾフの兄弟』においてイワンの語る「大審問官」の物語へと議論を収斂させてゆく。

周知のように、ドストエフスキはカラマゾフの兄弟のなかで、イヴァン・カラマゾフの劇詩「大審問官」の形式をかりて、ジェジュの悪魔との問答から重要な思想をみちびき出した。(同頁)

ここで吉本が取り上げるのは、キリスト教が時代とともに変貌し、墮落したという問題である。

ドストエフスキによれば、原始キリスト教の重要な思想のひとつである神との直結性の意識を、人間の絶対的な内面の倫理と結びつけて考える考え方が、時代とともに、現実の秩序という恐るべき壁にぶつかって、つぎつぎに変貌し、墮落し、キリスト教が、教権というバベルの塔をきざぐることによって、人間と神との間に関門のように立ちふさがったとき、マチウ書のなかの悪魔の問いは真理として実現されたことになると考える。(七〇頁)

キリスト教の「変質」あるいは「転落」という問題意識は、吉本において、すでに一九五〇年三月に制作された「覚書I」のうちに次のように記録されている。

僕は後悔といふ魔物、その親族である宗教的ざんげを嫌ふ。且てキリスト教を墮落せしめた要因の一つは、キリス

ト・イエスにおける自己嫌悪としての悔ひ改めを、慰安としてのそれに転落せしめたことである。自立を依存に、独立を従属にすりかへたことである。(『著作集』第一五巻、一一頁)

ここで吉本は、キリスト教の「墮落」は「自立を依存に、独立を従属にすりかへた」ところに生じたと論じている。つまり『マチウ書試論』「2」のモチーフは一九五〇年ころから吉本のうちに萌していたのである。それは一九四九年に小林秀雄批判を展開してのち、吉本はいっかんして、このテーマ追求していたということになる。そして、じつは、つぎに見るように、それは小林秀雄のカラマゾフ論の中心的なテーマであったのである。

このように考察するなら、「2」のほうが「1」よりも先に発想されたということが分かるだろう。少なくとも「1」と「2」とが別々の系統のモチーフに属しているということだけは確かである。

第二章 小林秀雄の解釈

吉本は、『週刊読書人』に連載されたインタビュー「戦後五年を語る」のなかで、

この種のテーマを文学的に論じたものはないかと一生懸命探したんですが、ほとんどなくて、わずかに、ドストエフスキの『カラマゾフの兄弟』のなかに、独特の解釈の仕方である新約聖書を論じている箇所がありました。キリストが確固たる信仰を確立する前に、荒野で悪魔に試される場面がありますが、そのところがわりあいと面白かったんです。(『吉本隆明が語る戦後五五年 第五回』一五〇六頁、三交社)と語っている。

ここでも、そしてほかの場面でも、吉本は『マチウ書試論』

と小林秀雄との関係についてはいっさい触れていないが、『マチウ書試論』「2」の執筆において、吉本が小林秀雄のドストエフスキー論を意識していたことは間違いない。吉本が戦中期から熱心に小林秀雄の文章を読んでいたことは、すでに別のところで指摘したところである。

小林秀雄に、『文芸』一九四一年一〇月号に掲載された「カラマゾフの兄弟」と題する評論がある。吉本は『マチウ書試論』「2」の執筆にさいして意識していたのは、おそらく小林のこの論稿である。

たとえば小林は、評論「カラマゾフの兄弟」において、ルナンの『キリスト伝』を引き、ドストエフスキーがルナンの著書を読んだかどうかは明らかではないがと前置きして、

キリストは決して不可解な人間ではない、たゞ迷信の雲が彼を覆つて了つたに過ぎない、この人物の真に美しい倫理性を明らかにする為には、聖書の伝説の注意深い吟味と分析とを要する。言ふ迄もなく、これがルナンが見事に辿つた道筋であらう。(『小林秀雄全集』第七巻、三一六頁、新潮社)と述べ、そこにはじめて「人間キリストを描かうとする、安全な土台が出来上つた」とつづけている。

同じように、吉本もまた『マチウ書試論』「2」の初めのほうで、

神学者ルナンが意図したのは、(中略)どうしたら人間のゆるやかな判断力の進歩を、信仰のダイアレクティクとして取入れることができるか、ということであった。(五一頁)と、イエスの奇蹟物語をはじめ「批判精神」によって解釈した人物としてルナンに言及している。ルナンの著作が聖書の合理的、批判的な研究の出発となったという評価において、両者の議論は共通している。

また小林は「大審問官」の物語の背景について、
イヴァンの「大審問官」といふ劇詩の舞台は、十六世紀

のスペイン。宗教裁判の炬火が、日毎に多くの異教徒を焼き殺してゐる、セヴィリヤの街を、キリストは、千五百年前、三十三年間、人々の間を遍歴した同じ人間の姿を借りて、ひそかに訪れる。ひそかに訪れたのだが、人々は、どういふわけか、それが主だといふ事を悟り、彼の後に従ふ。

(前掲、三〇七、八頁)

と記述しているが、吉本の、

ドストエフスキーは、イヴァン・カラマゾフの口を籍りて、劇詩「大審問官」の舞台、十五世紀のスペイン、セヴィリヤに、ジェジュは、こつそりと人知れず姿をあらわすと書いている。イヴァンは聴き手アリョーシャにいう。「人々は——不思議なことに——キリストだと直ぐに感づいてしまふ。ここが僕の劇詩の中で優れた部分の一つなんだ——つまり、どうして人々がそれを感じるかというところがさ。」(七〇頁)

という解説は明らかに、小林のものを踏まえていると思われる。もちろん同じ作品について論じているわけであるから、おのずから共通する部分があるのは当然のことであろう。この部分は原文では以下のようになっている。

キリストは気づかれぬようにそつと姿を現わしたのだが、ふしぎなことに、だれもが正体を見破つてしまふ。ここは叙事詩の中でもっともすぐれた場面の一つになるかもしれない、つまり、なぜ正体を見破るかという個所がね。(『カラマゾフの兄弟』原卓也訳、新潮文庫)

こうして見ると、両者とも原文を踏まえているのであるが、キリストが「ひそかに」こつそりと「訪れたのに」「どういふわけか」不思議なことに「人々がそれに気づいてしまふ」という部分をとくに強調している点で共通していることが知られる。

さきの引用に続いて小林は、イエスが悪魔の試みを拒絶したことについて、

伝説によれば、イエスは、その驚くべき信仰の生活を始めるに当つて、荒野に導かれ、悪魔の試みを受けた。イエスは、きつぱりと悪魔の試みを拒絶したが、悪魔の方でも、きつぱりとイエスを離れ去つた。(中略)「大審問官」の作者イヴァンの熱烈な興味をひいたのは、この永遠に和解する事のないと見える両者の対立であり、大審問官の難詰するところは、イエスのあれこれの意見や行ひではなく、荒野に於けるイエスのきつぱりとした拒絶といふものだけに向けられてゐる。(前掲、三〇八頁)

と述べている。
吉本もまた、先の「大審問官」の背景を叙述した引用に続いて、以下のように述べている。

ここで、ドストエフスキイの言いたかつたことは何か、悪魔の問いの原則のうえに、うち立てられた教権の秩序のもとでは、ジェジュに象徴される神との直結性の倫理が、しいたげられた、和解しがたい姿であらわれねばならない筈だと、ドストエフスキイは言いたかつたのである。(七〇頁)
ここでも「和解する事のないと見える両者の対立」と「和解しがたい姿」という言葉の共通性が注目される。

小林秀雄はドストエフスキイの思想について以下のように総括している。

四十日断食したイエスに向つて、辺りの石ころをパンに変へてはどうだ、といふ悪魔の言葉に対し、イエスは、有名な「人の生くるはパンのみに由るにあらず」と答へる。大審問官の解釈によると、この時、イエスが、先づ何を置いても言ひたかつたのは、人間の精神の自由といふものであつた。(前掲、三〇九頁)

これに対して吉本は、「大審問官」に表現された思想について、かれはここで、人間の自律性とは何か、自由とは何かとい

う問題を、かれ自身の思想の裏をもちいて展開したのに外ならない。(七一頁)

もちろん、五七回も出現するように「自由」という言葉は「大審問官」の章のキーワードともいえるが、人間の自由という視点を「大審問官」のもつとも重要なテーマであるとすると点において、小林の影響を指摘することができらるう。

つづけて吉本は、「人間や人間社会にとつて自由ほど堪え難いものは他にないからである！」とイワンの語る悪魔の言葉をパラフレーズして、

ドストエフスキイのこの解釈は、まるで見当はずれのように思われるが、実は、はつきりと原始キリスト教の思想的特徴をふまえたうえで、神との直結性の倫理と、人間の生きるために踏まねばならぬ現実と、の重さを比較し、その何れをとるかを撰択せねばならない。あいまいな態度は存在し得るものではないぞ。という悪魔の問いの本質をつかまえてゐる。(七二頁)

と指摘する。

これは小林の、自由とは何物だらう。一向不確かで曖昧なものであるばかりか、人間にとつてこんな厄介なものもない。(中略)皆自由に飛び付きたがる。だが、やがて解つて来る。とゞのつまり「人間にとつて平安の方が、(時としては死でさへも)善悪の認識に於ける自由な選択より、遙かに高価なものである事」が解つて来る。強制は堪らぬといふ。そして自由の名の下に反抗する。(三〇九頁)

しかし、このようにほぼ小林秀雄の論旨をなぞりながら『カラマーゾフの兄弟』を解説してきて、吉本は、「だが、ぼくは別の解釈の方向をたどり、原始キリスト教の思想的特徴へゆきつこうと思う。それがぼくの目的だから」と、意識的にそこか

らの方向転換をはかる。

第三章 吉本隆明の解釈

吉本は、これ以後、原始キリスト教について、その「神と人間との関係」についての考察を展開する。

吉本は「マタイ伝」の物語について、「ドストエフスキイが、イヴァンの劇詩、「大審問官」でとりあげたのはこの点であった」として、『カラマーゾフの兄弟』の文脈のなかで解釈しつつ、ドストエフスキイは、原始キリスト教が「奇蹟と神秘」を拒絶し「人間性の自律」を肯定し、

ドストエフスキイはここから、地上のパンと、人間の自律という、決して和解しそうな二つのものの対立として、マチウ書のジェジュと悪魔との問答を解釈し、それによつて、革命前夜のロシアの現実について、かれがそうであると感じた見解を象徴してみせたのである。(七四―七五頁)と指摘する。

吉本はここで、原始キリスト教の思想とドストエフスキイの思想を峻別したうえで、ロシア革命前夜のロシアというドストエフスキイの生きた時代の状況からそれを解釈するという、明らかに小林秀雄とは異なる解読の方法を提示している。

つづいて吉本は、ユダヤ教について、後期ユダヤ教の概念によると、人間が生きることの倫理的な意味は、神からさずけられた律法によつて規定されている。この規定は内面的な規定でもあり、また社会倫理的な規定でもある。神の口から出るすべての言葉によつて生きるというのは、ユダヤ教の概念では神からさずけられた律法にしたがって生きるということに外ならない。(七五頁)と語り、さらに、

このユダヤ教の理念は、原始キリスト教が非難するほど下

らないものではない。そこには古代人がどのような自然に、信仰と社会倫理とを一致させたところで生の意味を考えたかがよくあらわされている。(七五頁)

と述べる。そして、原始キリスト教はこれを「形式主義」として非難しているが、それは神の言葉から「社会倫理的な意味」を奪い「観念化し」、「現実的なもの一切から隔離」することとなったと吉本は批判する。

ユダヤ教と原始キリスト教の関係を論ずるにあたって目立つのは、吉本が積極的に心理学の知見を援用することである。

原始キリスト教が、ユダヤ教にたいして憎悪を抱いたのは、ユダヤ教が律法を人間の生きることの意味と調和させ、そこに現実的な社会倫理をうちたてることで、現実と信仰とを一元化していることが癪にさわってしかたがなかったからだ。(七六頁)

吉本はここで「癪にさわって」というような日常語を使用して、原始キリスト教がユダヤ教に懐いた心理へと論点をしぼっていく。原始キリスト教はこうした「倒錯心理」をもとにして、その教義を完成していったと吉本はつづける。

そこには、おそらく、マルクス主義とも小林秀雄とも異なる独自の方法を提示しようとする意図が秘められていたと思われる。つまり、吉本は、あくまでも文学に内在的な方法で解読しようとする小林と、文学にたいして外在的に時代状況を挿入しようとするマルクス主義とを、心理学的な方法によつて媒介、あるいは接合しようとして試みているのである。この傾向は「3」においてさらに深まることになる。

吉本は、ついで、イエスの行った奇蹟についてつぎのように述べる。

ドストエフスキイは、イヴァン・カラマゾフの口を藉りて、ジェジュがここで人間の自由な信仰というものを、奇蹟にうりわたしたくなくだったのであると言わせている。人

間を奇蹟の奴隷にすることによって、人間の心は奴隷的な
歓喜を呼びおこしたくなかったのだと。(七七頁)

と述べている。

ここで吉本は再び小林秀雄を参照している。小林は「マタイ
伝」の同じ部分について以下のように述べている。

悪魔の次の試みに対しても、イエスは同様な態度をとつ
た。悪魔が、神の子ならば、宮殿の頂から身を投げて見よ、
と言った時、イエスは、神を試みてはならぬと拒絶した。

「つまり、例によつて、人間を奇蹟の奴隷にしたくなかつ
たからだ。」(前掲、三一〇―一頁)

もちろんドストエフスキーの原文には「奴隷」の語が七回も
登場する。しかし、それらは「奴隷に身をやつした天下の主」

「陰気くさい補佐役たちや、奴隷」「囚人の奴隷的な歓喜」「奴
隷化」など、いずれも具体的に奴隷という身分を指しており、
「奇蹟の奴隷」というような比喩的な言い方は見あたらない。

「囚人の奴隷的な歓喜」という比喩的に見える使い方の場合も、
事実上の奴隷身分以外を意味するものではない。「奇蹟の奴隷」
という言葉と概念はあきらかに吉本が小林から受け継いだもの
である。

しかし、「奇蹟の奴隷」という言葉によつて、小林がストレ
ートに奴隷的状态を否定しているのに対して、吉本はそこに、
さらに「奴隷的な歓喜」という言葉を付け加えることによつて、
人間の屈折した心理的状态を提示している。

だが人間は、はるかに下らなく出来ていて、神よりも奇蹟
を欲し、自由な信仰よりも奴隷的な従属を欲するように出
来ている、とイヴァンのあやつり人形「大審問官」は語る。

(七七―八頁)

吉本が、「大審問官」をイワンの「あやつり人形」とよんで
いるのは、おそらく、小林の、

大審問官を操る者はイヴァンであり、イヴァンを描いてゐ

るのはドストエフスキーである事を見落さない様にこれを
整理し、時にはその言外の意味さへ推察して行かねばなら
ない。(前掲、三二二頁)

という叙述を踏まえたものと思われる。しかし、イワンの主張
のなかから「自由な信仰よりも奴隷的な従属を欲する」という
人間の心理を引き出してくるのは、小林には見られない、吉本
に独自の視点である。

そして、そこから、吉本は、原始キリスト教からローマン・
カトリックへの変容という問題を引き出してくる。

ここから、独りで走るドストエフスキーの論理は、奇蹟と
神秘と教権によつて、心情と現実の王国をふたつながら支
配していったローマ・カトリシズムにたいする苦々しい感
情につらぬかれていく。またしても悪魔の試みのうえにバ
ベルの塔をきざいだしたのは、ローマ・カトリシズム自身では
ないかと言いたかつたのである。(七八頁)

ここには、あきらかに、
君等は君等の猿智慧が編み出した秩序の囚人であり、奴隷
である事に変わりはない。確乎たる哲学も持つがよい、政治
理論も持つがよい、決して完成される事のないバベルの塔
を築くには、恰好の材料だ。(前掲、三二二頁)

という小林秀雄の言葉が反響しているように見える。
小林が、これに続けて、
老人は、デモクラットであつてもいゝ、ソシアリストであ
つてもいゝ、当代の「リアリスト」達、わかわかしい「人
道の戦士」達よ、君等は、悪魔の疑ひを華々しい理論の下
に押し隠してあるのではないか、(前掲、三二五―六頁)

と論じているように、小林は、ドストエフスキーの作品のうち
に自らの生きる一九四〇年代前半の日本の現状を重ね合わせて
いるのである。もちろんそれこそが、小林の評論の魅力であり、
吉本が小林に惹きつけられ所以でもあつた。

しかし、小林の場合、あくまでも、「大審問官」の主人公を社会主義者、現実主義者あるいは人道主義者に類比しているのである。これに対して吉本は、当時のロシアの時代状況と照らし合わせることで、ドストエフスキの思想を思想史的に考察しようとしているのである。

勿論、ドストエフスキの論理の裏では、ロシアの現実の浅瀬をわたる革命的思想家たちへの近親嫌悪が二重うっしりとなつて絶えず存在していたことはたしかである。(七八頁)つまり、吉本は、小林のようにドストエフスキを現実の思想状況と直接類比させるのではなく、その生きた状況のうちに位置づけることによつて解釈しようとするのである。

吉本はさらに、「マタイ伝」が「ジェジュが死者を蘇らせ、病者を治療し、パンをふやす」など、熱心にイエスの奇蹟について描いていることについて触れ、「ジェジュの奇蹟物語が、注意ぶかいヘブライ聖書の引用のうえに成立していることは既に指摘したとおりだが」と「1」で論じた内容について言及したうえで、「ドストエフスキの解釈するのとおり、原始キリスト教にとつて奇蹟はひつようなものではなかつた筈だ」と述べ、ドストエフスキの解釈から離れて、マチウ書の作者にとつての必要というという観点から、吉本の独自の解釈を展開する。これもまた、小林には見られない、吉本に独特の発想であるといえる。

一篇の教祖物語をつくりあげるために、それが必要であつたのである。人間がもともと上等に出来ていないということを熟知し、それをジェジュの弟子たちに振りあてて描いてみせたのはマチウの作者そのひとでなかつたか。(七九頁)それとは「奇蹟」である。つまり「神と人間との距離の大きさ」を実証するために「奇蹟」が必要であつたと吉本はいうのである。つまり吉本は「マタイ伝」の物語の構造から、人間の不完全性と教祖としてのイエスの必要性という視点を探り出し

てくる。

このような分析は、たとえば戦後すぐに執筆された「伊勢物語論」において、作品の分析を通してそこに複数の作者をあぶり出したように、吉本の聖書の独自の読み方が効果をあげている部分である。

ドストエフスキの物語をうけて、吉本はつぎのように論を展開する。

功利的実証主義と曲解された悪魔は、恐らく、度しがたい奴めという嘲笑をうかべてジェジュを離れ去る。以後、悪魔はキリスト教に近づこうとはしなかつたけれど、キリスト教の歴史はあきらかに悪魔に近づいたのである。(八〇頁)ここで話題は、「現世的秩序とキリスト教的秩序との和合」に移る。それを吉本は「史上最大の卑劣なドラマ」と呼ぶ。

ここで現世的支配権とキリスト教の偏執的苛酷さとは見事に結合した。たとえば、ぼくたちはトマスのスンマ・テオロギカにおいて精緻な論理体系による神の存在の弁証をよむことができるとともに、彼の経済学において支配権力擁護の弁証をよむことができるのである。(中略)何れにせよ、原始キリスト教の強烈な空想的な倫理性が俗化してゆくのは束の間のことであつた。この俗化は、外から現世的権力との和合にささえられ、内からは教義の論理化によつてささえられたのである。(八一頁)

このあたりの議論は、先に引いた一九五〇年三月制作の「覚書1」においてすでに展開されている。たとえば、

神への信仰と従属。それはやがて権力と貪らんへの奉仕を人に教へるのではなからうか。(前掲、八六頁)

という断片的な記述、また、
叡智は僕を疲れさせ衰弱させるだけで、僕はもう数多くのことを思考したりすることが危ふくなつてゐる。例へば神への信仰は現在では権力への正当な奉仕にすぎなくなつた

し、人性から神性のほうへ……といふ指向性の公理は少しも僕を納得させない。十九世紀までのあの度ましい人間の演算法はいまでは滑稽な位だ。何がそれに代つて僕たちの問題となつてゐるだらう。(同、七四〜五頁)

という記述、さらに、

〈秩序とは搾取の定立のことである。〉

世には搾取といふ言葉を好まない人々がある。悲しいことにそれらの人々はこの純粹な政治経済学上の概念に対して、神を感じてゐるのだ。いや人間をと言ふべきだらうか。やがて機構としての搾取は排滅し、人類はほんとうの歴史に入るだらう。(中略)

この点についてのオツペンハイマーの注意を書きとめておこう。

〈正系主義が支配と搾取とを、人種学のおよび神学的論拠を以て理論づけることは、どこでも同じである〉そうだ。そして現在でもといふ言葉をつけ加へよう。(同、八〇頁) という記述など、キリスト教と権力との関係を指摘する記述が目立つ。

しかし、「2」ではこのような発想は十分に議論されないまま、『マチウ書試論』は「3」へと展開していくことになる。

第四章 小林秀雄批判としての『マチウ書試論』

先に引いた「戦後五〇年を語る」で吉本は『マチウ書試論』のモチーフについて次のように語っている。

敗戦のすぐあと、とにかく何もやる元気がないという状態のなかで、いろいろなことを考えました。そのときに一つ反省材料になつたのは、世界のイメージをどのようにつくるかについて、戦争中までの自分の知識、教養のなかに何一つ考えがなかつたということです。世界という概念と、

それをとらえる方法をまったく知らないということが反省材料になつたわけです。(前掲、五頁)

「世界という概念」と「それをとらえる方法」という発言については、その後、吉本が「マルクスの世界認識の方法」に言及していることから、マルクス主義を意味するものであるというのが一般的な理解であつた。

しかし、吉本自身は、『自著を語る』(二〇〇七年、ロッキング・オン)で、本格的にマルクスの影響を受けるのは『マチウ書試論』よりあと、『言語にとつて美とはなにか』の頃であると語っている。

「戦後五〇年を語る」のマルクスの思想に触れる少し前の部分で、吉本は次のように語っている。

たとえば人間心理の洞察については、自分なりに文学青年でしたから、文学が解明しているかぎりでのやり方はひとりでもつていたと思うんです。それが十分であるかないかは別として。そういう意味では、自分は戦争中もミスしていないと思つていました。じゃあ、どこでミスしたのか、何がダメだったのかというと、そういうふうな文学を介して知つた人間の心理や精神の動きの洞察は、世界が向こうから変わつてしまうことに対してはまったく無力だつたということなんです。大きな反省材料になりました。いくら人間の精神について深い洞察があつても、世界の方から変わつてしまつたら、その人は必ずダメになつちゃう。そういう感じ方がとても強くあつたんです。(前掲、五〜六頁)

ここには、「文学青年」すなわち小林秀雄の影響を受けていた自らの思考方法から脱却しようとする姿勢について語られているのである。『マチウ書試論』は、一九四〇年代末における小林の影響から脱却しようとする試みの、総仕上げであつたといふべきであろう。

「3」に登場する「関係の絶対性」という概念は、その概念

自体として重要なのではない。それは、一九四九年に吉本が『詩文化』に発表した小林秀雄を批判する企図を込めた三つの論稿のうちの最後の論文、『詩文化』一九四九年十一月号に掲載された「方法的思想の一問題——反ヴァレリイ論——」において到達した、「人々が無意識のうちに結んでゐる連帯性を決定的に疑ふ」という認識を受け継ぎ、さらに「共同幻想」という概念へと鍛えられてゆく、吉本にとつてもつとも重要な概念の過渡的な形態を示すものであったと捉えることによつてはじめて正しくその意味を理解することができるのである。

註

(1) 吉本自身が、奥野健男、日野啓三、服部達、清岡卓行らとともに創刊した雑誌。三号で廃刊した。

(2) 「ぼく」から「わたし」というこの傾向をそのまま同期の詩作品にあてはめることはできないが、ほぼ同じ傾向を指摘することができる。一九五〇年後半に制作された「日時計篇Ⅰ」では「ぼく」と「わたし」、一九五一年制作の「日時計篇Ⅱ」では「わたし」、一九五二年八月刊の『固有時との対話』では「わたし」、一九五三年九月刊の『転位のための十篇』では「ぼく」が主語表記の中心になっている。一九五三年から五四年にかけて制作された「(手形)詩篇」では「ぼく」が中心となつてゐるが、一九五六年ころから「わたし」へと転換していくことが確認される。ちなみに、主語表記「ぼく」についての考察は、吉本の『高村光太郎』の成立過程についても有効であることをここで指摘しておきたい。『高村光太郎』のうち収録された諸論稿のなかで「ぼく」という主語表記のものがある。一九五五年七月に『現代詩』に発表された「高村光太郎ノート——戦争期について——」である。ここでは主語表記が十二個所使われており、すべて「ぼく」に統一されている。これが翌一九五六年九月に刊行された『文学者の戦争責任』に収録されたさい、そのうちの二個所だけが「わたし」に変えられている。さらに一九五七年七月に飯塚書店版に「V 戦争期」

と改題して収録されたさいには「わたし」が八個所、「わたしたち」が三個所になつており、一個所だけ「ぼく」のままになっている。さらに一九五八年一〇月に五月書房版に収められたときには「わたし」が四個所、「わたしたち」が三個所に変えられ、「ぼく」の表記はすべてなくなつてゐる。一九五五年四月刊行の『荒地詩集』に発表された「高村光太郎ノート——のつばの奴は黙つてゐる——」では、主語表記は二個所見えており、すべて「ぼく」になつてゐる。飯塚書店版に収録されたときにはこの二個所が「わたし」に変えられてゐる。さらに五月書房版では主語表記はすべて削除されている。以上の事実は、いずれも吉本の主語表記の一般傾向と一致する。『現代詩』掲載の「高村光太郎ノート」、『文学者の戦争責任』、飯塚書店版『高村光太郎』などの入手については、愛知教育大学付属図書館の参考係の方々の協力を得たことについて記して感謝の念を表したい。

(3) ちなみに吉本は『マチウ書試論』「2」の、この少し後ろの部分で「ドストエフスキイが、「大審問官」によつてあきらかにしたものは、マチウ書にあらわれた原始キリスト教の思想とは何の関係もない」(七一頁)と付け加えている。吉本は、原始キリスト教の成立について論じた「1」と、「山上の垂訓」について論じた「2」とのあいだに齟齬があることを自ら意識していたようである。

(4) たとえば高尾利数「党派的思想」の克服——『マチウ書試論』詩論『現代思想』一九七四年一〇月)、笠原芳光「吉本隆明における聖書」『現代思想』(一九七五年一月)、久米博「思想と信仰のあいだ——吉本隆明の宗教論をめぐつて」(『吉本隆明を(読む)』一九八〇年一月、現代企画室)など。

(5) 吉本は一九四六年末に制作された「伊勢物語Ⅰ」で、『伊勢物語』のうち三人の作者を析出している。

〔付記〕本稿の前提として、本年四月にペリかん社より刊行された拙著『吉本隆明の一九四〇年代』第七章「小林秀雄からの脱出」をあらかじめ参看されることを希望します。